
神の糸

酢橘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の糸

【Nコード】

N0150S

【作者名】

酢橘

【あらすじ】

人より少しだけ敏感なダメ大学生。

突然現れた自称・女神の少女は彼に願いを届ける。

「すみませんが、死んでくれませんか？」

死の宣告をされた青年が宿命、運命と言う因果と抗う

もう少しだけ世界が良く見えたら、もう少しだけ世界の声が聞こえたら

これはそんなファンタジー

処女作なので色々と訳の分からない部分や、誤字脱字等で見難い所があるかもしれない。

「ここもつとこうしろよ」「みたいな指摘をして頂けると有難いです。寒いギャグはそつとしてあげて下さい。

それでは拙い文ではありますが、楽しんで頂ければ幸いです。

序章

夏が過ぎたといってもまだ暑い季節。

6畳一間の安アパートは熱気に包まれていた。

暑さが苦手な性分としてはかなり辛い。

かといってクーラーを付けるのは金銭面から憚られた。

こちらら貧乏が売りの大学生なのだ。

そこらの主婦より光熱費に敏感である。

先月クーラーの使いすぎで電気代が凄い事になっているのは把握済みだ。

しかし、何といつても今日は真夏並みに気温が高い。

何とかならん物かと考えて妙案を思い付く(このときは妙案だと思っていた)。

家から5分程歩けば大学があり、そこには涼しい図書館もあるではないか。

普段は外に出る事が億劫でしかないが、この暑さから逃れられるのなら5分程の外出などは何の事ではない。

身支度を適当に済ませ、軽やかな足取りで大学へ歩を進める。

このときの自分にもし声をかけることが出来たなら、この一言を送りたい。

「早くお家に帰って自宅警備の仕事に戻りなさい。この童 野郎」

1 - 季節外れ

夏というものはどうも人をおかしくさせるらしい。

この暑さを考えたらそれはそうだろうと納得するしかない。

しかしこの季節、脱ぐ馬鹿は多いであろうが、着込む馬鹿には初めて出会った。

道路の端でジツとこちらを見つめる少女。黒いブーツに黒いコート。

日本人形のような端正な顔立ちをしていたが、季節外れの格好のせいで台無しだ。

なんとなく目で追われている気もするが、人ぐらいしか見る物がないのだろう。

それ以上興味を示さず、私は少女の前を通り過ぎた。

いや、正確には通り過ぎたつもりだった。

あるうことか少女は自分の隣を歩き始めたではないか。

正常な男性であれば「これ何てギャルゲ？」

と、なるのだろう。

もしかしたらその後、なんやかんやなるのかも知れない。

しかし残念ながら当方、他人とのコミュニケーションが最近不足気味である。

いきなりこんな少女に「何か用ですか？」なんて話しかけるのは難易度が高すぎる。

それにもしもの方が一、たまたま歩き出すタイミングに合ってしまっていただけだったら。

それは物凄く赤っ恥をかく展開になるであろう。

横をチラチラ見ながらあーだこーだとブツブツ唸る大学生。

傍から見ればそれがもう既に恥ずかしい事にこのときの私が気付くはずもなかった。

その様子に気付いた少女が口を開いた。

「あなた、私が見えているんですか？」

その言葉を聞いて、先ほどまでこんがらがっていた思考が急速に停止する。

私は知っている。その言葉を。響きを。

今まで幾度となく聞いた音の響きだ。

少女は小さく加える

「あ、でも見えてはいても聞けはしないんですよ…」

うーんと軽く首を捻って唸っているようだ。

「あー、大丈夫ですよ聞こえてますので。いや、まあ何というかそちら側の存在の方でしたか。ハハハ…」

本来ならばあまりお近づきになりたくないのに、無視するのが定石であるが、

これほど可愛い姿は珍しいのでふと反応してしまった。

それに少女の方は驚いたような顔で答える。

「あの、本当に聞こえるのですか？口唇術でもなく？」

「口唇術？そんな素敵特殊技能は生憎持ってませんね。ちゃんと聞こえているし、見えていますよ」

「そう…でも何故…ああ、そういうことですか。手を焼く訳だ。

フフツ、あなた面白いわね」

なんだか勝手に納得したご様子で、しかも何故か私を気に入ったようだ。

こういう輩にウロチヨロされるのは健全な社会生活を送る上で邪魔でしかない。

それになんだか嫌な予感がする。

「まあそういうわけだから。それじゃっ！」

爽やかに逃げた。

2 - 自称女神様

「それで、君はなんでここに居るのかな？」

図書館に入り、適当な本を読んでいると気付けば少女は目の前に座っていた。

「私から逃げようなんて無理ですよ」

「何それ怖い。プロストーカーだったの？」

「何ですかそれは？私は今も昔も女神様ですよ」

め、女神様…ぷぷぷ

これからこの少女の事は女神様（笑）とお呼びしよう。

「ああ…電波系プロスト…おっと、いやなんでもない。で、女神様が私に何か用ですか？」

「んー…何から話せば良いか分かりませんが…というより話なんて前提で来ていませんから、まだ纏まっていないというのが正確ですね。そうですね。あなた、糸みたいなもの切った事ない？」

本音が少し漏れたが女神様（笑）は気にした様子もなく用件とやらを話した。

しかし、糸なんて切った事ない人は居るのだろうか？

居たとしたらお金持ちなんだろう、そして専属の糸切り職人みたいのが多分居るんだろう。

ん？専属の糸切り職人？なかなか良いじゃないか。

小さな鋏でちまちま糸を切るなんて器の小さい漢にしか出来ないことだ！

よし、糸切り職人に俺はなる！

「おい、聞いてるんですか？童 野郎さん？」

怒られた。

まあ真剣に考えるとしよう。

流石に糸そのものではないのだろう、糸のようなもの糸のようなもの…

それでもってコイツみたいのが興味を示しそうなもの。

…1つ心当たりがあった。

「それって年に1回、どこのだれだかが付けていくあの長つちよろくて気味の悪い糸の事ですか？」

女神様（笑）はそれを聞いて納得したような呆れたような複雑な表情になる。

「ああ、やっぱりそういう事ですか…何となく想定していましたが、あなた、触る事も出来るんですね？」

「触る事は出来ません。ただ触れるだけです」

「どちらと同じようなものでしょう？」

「触ると触れるは全然違う。というかそんな言葉遊びをする気はないです。で、その糸みたいのが何だっって言っんです？」

「あなたが毎年毎年切っているその糸のようなもの。一番解りやすい言葉でいうとそれは縁と呼ばれるものなのです」

「縁？赤い糸みたいなものですかね？」

「そうですね。その表現は的確でしょう」

「とすると、私は毎年毎年赤い糸を切っていた？」

「ですね」

満面の笑みで答えられた。

出会ってから一番の笑顔だろう。

こいつ、やはりプロストーリーカーか。

「今とても失礼な事考えてますよね？まあでも安心して下さい。あなたの切っていたものは赤い糸なんてメルヘンなものじゃありません」

「と言いつと？」

「あなたを殺す人との縁ですよ」

3 - 五感

「へ？」

思わず間抜けな声が出てしまった。

「ちょ、ちょっと待って下さい。殺すとか物騒な事は置いておいて、さつきから聞いていれば縁だのなんだのあなた何者なんですか？」

「だから女神だって言ったじゃないですか」

「いやいや、幽霊とか宇宙人なら信じますよ？しかし流石に神様はねえ……」

「あなた信仰心のかけらもない人ですね」

「目で見たものしか信じませんし」

「じゃあ目の前に神様いる。はい終わり、QED」
「神様の分際でQEDとか言ってるんじゃないですねーですよ！そういうところが信じられないんです」

少し声を荒げてしまった。

図書館の職員から訝しげな目を向けられたので、えへへと可愛い愛想笑いで誤魔化しました。

誤魔化せた…かな？

「落ち着いて。顔と口調が気持ち悪くなってますから。そうねえ…あなた神社とか行った事がないの？」

「うち仏教なんで」

「ああ、じゃあお寺でも良いや。お寺には仏が居ますよね？」

「あれはルーツは人間、幽霊の類だと思っっています」

「あーそうなるのか…うーん…あ、そうだ！宇宙人の類だと思って良いです。宇宙人は信じれるんでしょう？」

それで良いのか神様。

全国各地のその道の方に怒られるのではないだろうか。

「宇宙人はこっち側の存在ですよ」

「ああもう！めんどくさい！これだから包 野郎は嫌いなんですよ」

「何ではれてるの!？」

名誉毀損だ！裁判長！提訴を申し上げます！

ほら、下半身を覗くとご立派な…やっぱ弁解の余地ありませんでした。

提訴を取り下げます。

「真性なのは黙つといてあげますから。まあ神様云々は良いじゃない。そういう存在だと思ってくれば。それであなたは何者なの？」

「ギリギリ仮性人だよ…え？」

「火星人なのですか？」

「話の脱線はもういい！ちゃんと説明するから！」

私の身の所の説明をかいつむところだ。

何故幽霊等が見えるのか、聞こえるのか、触れるのか。

私自信もまだ完全にわかりきってはいないが、おそらく感じ取れる周波数の違い。

普通の人間の五感がキャッチ出来ていない超高周波や超低周波の音や光。

それらを私はキャッチ出来ている。

触覚については良く分からないが、光や音の情報に敏感だから、自然と敏感になっていった。

という所が落としどころだろう。

「という事です。人よりちょっと感覚が鋭いだけの普通な人ですよ」
「普通…ではないですよね？」

「そうですね？例えば興奮状態なら普通の人でも見えたりしますよ。ほら、ホラースポットにいくと見えた！って言う奴絶対いるじゃないですか。一般の方でも恐怖心とかで交感神経が過敏になると見えたりするんですって」

「つまりあなたは常に興奮してるんですか？」

「俺は変態か！いや、否定は出来ない…グググ…」

「つまりあなたが常に性的興奮を得ている変態さんだから幽霊や神仏を感じる事が出来ると…」

「いや、だからね？変態とかじゃなく、ただ五感に優れた一般人ですよ」

「ふうん」

流されました。

めでたく女神様（笑）公認の変態です。
やったね！

4 - 運命

「まああなたの事は分かりました。私の事も分かって頂けましたよね？」

「納得はしていませんけどね」

「良かった。では本題の方に戻って宜しいですか？」

「えーと、なんでしたっけ？縁のお話ですか？」

「そうね。あなたが毎年切つてらっしゃる縁の糸の話です」

「あれねえ…なんか自分の体からビローンつてなつてたら気持ち悪いじゃないですか。それに、殺し相手との縁なんて切つて正解でしたよ」

あれを切つていなければ今ここに自分は存在しなかつた訳だ。

そう考えると恐ろしいが、あんな気持ち悪い糸、見れば切りたくなってしまうもの。

万が一切つていなければなどは微塵にも思わなかつた。

「それがねえ…そんな単純なものじゃあないのよ。あなた宿命論、または運命論なんてものをご存知？」

「宿命論？運命論？なんだか宗教臭さが半端じゃないですね」

「神様や超越的存在が人の未来を決めているって宗教的考え方」

「やつぱり…無理無理、現代っ子の私はそういう話わかんないですしおすし。それに信じる気もありませんから」

大体神様がなんでも決めてるって、それは幾ら何でも乱暴だ。

神様なんてものは下界に手を差し伸べず、ただ人の心の中にだけ存在するもの。

神様は耳元で「人よ、幸せであれ」と囁くだけなんて言った人は上手く表現したものだ。

「お寿司…？あなた時々意味不明な言葉を並べるわね。信じる云々はあなた次第つてところだけど、まあその宿命論の考え方つてもあながち間違いではなくてね。この地方では10月を神有月つて呼ぶのは知ってるわよね」

「あれ？旧暦10月だから11月ではないのですか？」

「そういう考え方もあるけど、神様だつてそんな我侭じゃないからね。人の生活に合わせて10月。その月に日本の神様は出雲で大集會するのよ」

「ああその話は聞いたことあります。なんでも縁の取り決めするとか…ちよつと待て、縁だと？」

「大正解。そこで決められたのがあなたと加害者、木田出雲の縁」

木田出雲、聞いた事はないが私を殺す予定だつた人のようだ。

しかし、何て物を取り付けてくるんだ神様とやらは。

どうせなら窓際で本を読む黒髪清纯文学少女と縁を結んでくれれば良いのに…」

「ん？待てよ、まさかあなたがそれ取り決めたんですか？」

予想を口にするが女神様（笑）の表情からするに外れのようにだ

「私はそもそも会合に招待されてないからね。去年招かれて何事かと思つたわよ」

「苛められてるんですか？」

精一杯哀れみの表情を作つてあげた。

「違う違う。ややこしいから詳しくは言わないけど、会合に行く神様と行かない神様がいるのよ。まあでも苛めではないんだらうけど、

「これは苛めに等しいかな…」

「どどういう事ですか？」

「だってあなたに死んで下さいって頼まなくちゃいけないのだから」

5 - 糸

「はい、わかりました…なんて訳にはいきかないですね」

「まあそうでしょうね」

さらりと言つてのける。

「では尋ねましょう。あなたは切った糸のその後の事を考えた事がありますか？」

切った糸がその後どうなるか、考えた事はあつた。

しかし、どこかへ飛んで消えるのだらうと安易に考え、深く考えた事はなかつた。

こんな質問をしてくるあたり、おそらくそんな単純なものでは無さそうだ。

「仮にも神様が作ったものですからね、消えてなくなるなんて事にはなりませんよ。さつきも言いましたがそんな単純なものではないのです」

やはり消えてなくなる訳ではない。

とすると一端を失った糸がどうなるのか。

ジワリ、と背中に嫌な汗が浮かぶのが分かつた。

「一端を失った糸は端を求めて彷徨い、そしてそれは2人の人間に縁を結ぶ。今回の場合だと殺す殺されるの縁を…」

彼女の言葉が何を意味するのか。

私は理解してしまった。

それは…

「それはつまり、あなたの代わりに誰かが殺されるといふ事です」

「私の代わり…」

「そう、あなたは12年間に渡り糸を切り続けてきました。つまり12人の犠牲を自らの代わりに強いてきたのです」

「その12人は私が糸を切らなければ死ぬ事にならなかった？」

「それは私にもわからない。ただあなたの代わりに12人は死んだ。それだけが事実よ」

頭が混乱する。喉がひどく渴く。

自身の代わりに12人が死んだ。

それは言い換えれば12人を殺した事と同義だ。

「しかし、あなたの言っている事が事実だとは認められない。私はまだあなたを女神だとかは信じてはいないですから」

最後の希望にすぎた。

事実を示す確たる証拠がなければ罪の意識は軽くなる。

「そうでした。あなたは目で見たものしか信じないのでしたね。では、後でこの近くの湖へ来て頂けませんか？」

「近くの湖…六道湖の事ですか？」

「そうです。そこに来て頂ければ信じざるを得ない、確たる証拠というものをお見せできるでしょう」

そう言っつて自信を女神と称する少女は図書館から姿を消した。

突きつけられた事実は重い。しかし確かめなければならぬ。

嘘か真か、いずれにしても六道湖に行けば全ては明らかとなる。

一度家にバイクを取りに戻った。

六道湖は5分ほど走れば着く場所である。

嫌な汗は未だに背中を濡らしている。

そして静かにスロットを回した。

六道湖、日本最大級の汽水域として有名な湖である。海水魚と淡水魚が混じり合う多様な自然環境となっている。そして、2年前水死体が発見された場所である。

「この子が2年前、ここで木田出雲によって殺害された住吉南さんすみよしみなみ」
自称女神がここを指定してきた時点である程度予測はついていた。しかし、目の前にしてもやはり信用しきれない。

一般に幽霊と呼ばれるものは、大概この世に未練ないし憎悪を抱いている。

そしてそれらは人間の知覚外の領域で存在している。そのためその存在はあやふやで存外に脆弱である。存在などと呼んでいるが、解りやすく言えば電気みたいなものである。

よほど酷い殺され方や生涯を送ったところで1週間、形態を保つのが精一杯である。

仏や名を残した人物などは多くの人に崇拜される事で存在自体があやふやなものから強化されるため、その形態を維持し続ける事が出来ているのだろう。

実際これまで目にした霊も多くは死後1日〜4日の者達ばかりだった。

2年もの歳月を経た幽霊を見るのは始めてである。

「本当に2年前の…？」

住吉南と呼ばれる女性に話しかける。

「…!?!?あなた、わたしが見えるのですね」

やや上擦ったような声で住吉さんは声を上げる

「あー、その辺のやり取りは良いから。ほら、皆飽きちゃってるし」
「メタ発言は止めて下さい。世界観が壊れます」
「細かい事は良いの！それよりほら本題に入って」

本題と言われても何から話したものが…

いきなり「あなたは私の代わりに殺された人ですか？」なんて聞いた所で意味はない。

それは住吉さん自身にも分からない事だろう。
首を捻っていると住吉さんの方から口を開いた。

「あなた、八重垣さん…ですよね？」

「そうとも。八重垣高良と申します」
やえがきたから

紳士的に答える。

やっと名前が出た事には喜びませんよ。

「私を殺した相手。木田出雲が私を殺すときに名前を呟いていたんです」

「私の名前を？」

「ええ、それはもう何回も何回も。だからきつとあなたに何か恨みがあるんじゃないかと思って。彼、凄く危険な匂いがありました」

「それは…そうだろうねえ」

「それをあなたに伝えたかった」

「なるほど」

木田出雲、そして彼が口にしたという私の名前を知っている辺りから彼女は本物だろう。

しかし疑問が残る。

ただそれを伝えるためだけに彼女は2年間も存在を保ち続けてきたのだろうか。

そんな事は不可能だ。

何かしらの助力を得なければそれ程長い期間存在し続ける事は出来ない。

「正確にはそれを伝えるように、と言われたんでしょう?」

先程まで水辺で遊んでいた自称女神が口を挟んだ。

「この地方の神様とやらに」

「はあ…正確にはそうですが、私自身伝えたい気持ちもありました」

なるほど、と思った。

神様とやらの助力があれば可能なのかもしれぬ。

しかし新たな疑問も湧く。

「何故、私のところへ寄越さなかったのですか?」

ふう…と溜め息をついて自称女神の少女は答える。

「あなたの所にこの子が行って、『気を付けて下さい』なんて言ったところで神様に何のメリットがあるの?あなたは『そうか気をつけよう』って思っただけでしょ?」

「まあ確かに」

「事情を話す訳にもいかないし、最初からこうする予定だったんで

しょう」

「そこまでして私を死なせたいんですか…」

「当たり前です」

結構神様とやらも残酷なものだ。

幽霊にはおおよそ時間間隔と呼べるものはない。

それでも原稿用紙2行分くらいのセリフのために2年間も置いておくとはなかなか酷い行いである。

「どう？死にたくなつた？」

「いや、全然」

「ありや」

どんな状況になれば人が生に固執しなくなるのか聞いてみたいものだ。

とはいえ人の犠牲の上に生きる事は少し辛すぎる。

犠牲を伴わずに生き続ける方法…

そんな都合の良いものは考えつかなかった。

しかし…関係のない人まで巻き込まない方法であれば、それは可能かもしれない。

1 - 縁結び

次の日になっても女神の少女は大学への行き道で待っていた。

「毎日ご苦労様です」

「ご近所さんで定番の挨拶をして颯爽と通り過ぎた。が、例の如く少女は並んで歩き始める。」

「そう思うなら早く死んでくれると助かります」

「1つ、聞いても良いですか？」

「何でしょうか？」

「神様は何故、毎年私に縁の糸を付けるのでしょうか？」

「別に毎年付けているわけではないの。一度そう取り決めてしまったから、縁が結ばれるまで付き続けるだけ」

「なるほど。でも12回も結ばれてますよね？」

「取り決めたのはあなたと木田出雲の縁。他の者では不履行よ」

神様も厄介な縁を取り決めて下さる。

一度決めたら取り消しも変更も出来ないなんて悪徳通販のようではないか。

クーリングオフすれば良かった。

「でもですね。そんな1人の人間の縁が結ばれないだけで問題になるもんなんでしょうか？」

「まあ本来、縁の糸が切れるなんて在り得ないし、結ばなくても全然問題ないのでしょうけど」

女神様は少し間を空けてから面倒臭そうな表情になる。

「あなたが毎年切るせいで他の人の縁が破綻しちゃうことが多いのよ。2本の糸がからまっちゃったりね」

「はあ、それで縁結びの不履行が頻発してしまうと」

「そ、神様の面目丸潰れ。そしてそれはそもそも神様って何よ。って存在意義の問題に発展しちゃうわけね」

存在意義の否定。

神様なんて呼ばれても実は幽霊と同じくらい希薄な存在なのかもしれない。

いわば2次元の存在。

面としてはあるが、奥行きがない。

確かにそこにあるが、そこにはない。

「でも縁結びなんて結ばれようが、結ばれまいが人は分かりませんよ」

「そこは私も知らないわよ。ただ、働かざる者食うべからず。って言うでしょ？お仕事はきちんとしなきゃ」

薄々気付いてはいたが、神様は意外と庶民的らしかった。

「はあ、それじゃあ本当に死ぬしかないと」

「何度も言ってるでしょ」

「いえ、敵は神だ！運命とやらに打ち勝つぜ！みたいな熱い展開になるかもしれないので」

「キヤー、何それおもしろーい」

どこぞのゆっくりさんも驚きの白々しさです。

「でも確かにそういう方がウケは良かったかもね」

「ストップです！」

前言撤回。

さすが神様、世界のことを良くご存知だ！

2 - 渴望

「ではこういうのはどうですか？」

「あら諦めの悪い」

「私と木田出雲。この2人の殺したい程の愛が結ばれば良いわけですよ」

「あなた相手の方、もう40前よ。きっと色々キテるけど愛し合っ
て良いの？」

「真面目に聞いて下さい。私は脳内だと鬼畜なんですよ」

「でも実行は出来ない童 だと」

「ほう…少女の姿であった事を後悔するんだな。私は真性のロリ
ンなんですよ！」

「知ってる。だからこの姿を選んだのだし」

「貴様…誘っているのか？」

どうもこの少女と話すと話が脱線しがちだ。

いかんいかん、話の膨らみすぎはキャラの暴走だと…ゲフンゲフン

「それで？」

「例えば私が逆に木田を殺す…というのはアリなんですか？」

ポカーンとしている。

呆れられたか、はたまたドン引きされたのかもしれない。

「それは…多分アリなんだけれど…あなた、人を殺す気？」

後者だったようだ。

目の前で「人殺しちゃっても良い？」なんて言われればそりゃそ
うだ。

私は顔を伏せた。

「さあ… 場合によつてはそれもアリかもしれない。だって12人も殺しているんでしょ？」

「12人も殺させたのはあなたよ」

「それでも私を殺す気だった。1人だろうが12人だろうが、ともかく殺人者になるべくして成ったわけだ」

「それは…」

「しかしまあ私のせいだというのは事実です。ですが12人を殺してきたのも事実」

「それはそうかもしれないけどっ！」

この件に関しては誰が悪だと問い掛けたところで無駄である。

私も神もはたまた実行犯の木田でさえ、12人を殺そうなどとは思わなかっただろう。

事実として神は取り消し不可の厄介な糸を2人に取り付けた。

私はそれを切り離し、身代わりを立てて木田にそいつを殺すよう仕向けた。

木田は縁の糸を頼りに人を殺した。

それが全て。

「それによつてはと言いました。私は夜になったら、もう一度六道湖へ向かいます。そこでもう一度、住吉南と話をしようと思えます」

「彼女に許しを請うの？」

「そうですね。彼女が許してくれるなら… といった所です」

「あなたは既に12人を死へ追いやつたのよ？」

「可能ならば全て聞きたいですが、それは叶わないでしょう」

「なるほど、11人の意思は無視するわけね。そこまでして生きてい？」

顔を上げて、少女と目を合わせる。
悲しい色の目だった。

「人間の生への渴望をなめてるんですか？例え犠牲の上にあった命でも、それをむざむざ捨てる訳にはいかない」

「哀れね…」

言葉にされると哀れという響きは思いの外胸に突き刺さる。
本当に哀れだと思われているのだろう。

「失望しましたか？」

「別に。人なんて皆そんな感じでしょ」

優しい嘘。

「理解のある人で助かりました」

「何にせよ、あなたたちの縁が結ばれれば私の仕事は終わりだから。
過程はいつでも良いのよ」

優しい女神様は嘘をつくのが下手だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0150s/>

神の糸

2011年10月8日22時27分発行